Title	「〈児童〉における「総合人間学」の試み第2回研究会」報告 「子どもを観察すること・記録に書くこと・話し合うこと：子ども・保育・教育を語り合える観察、そして記録を目指して」 入江礼子氏（共立女子大学教授・本学大学院人間福祉学研究科非常勤講師）
Author(s)	田澤，薫
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.25No.2, 2016.1 :16-18
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5648
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

報　告

「＜児童＞における「総合人間学」の試み第２回研究会」報告

「子どもを観察すること・記録に書くこと・話し合うこと
-子ども・保育・教育を語り合える観察、そして記録を目指して-」

入江礼子氏（共立女子大学教授・本学大学院人間福祉学研究科非常勤講師）

上段：入江礼子教授（発題者）

児童学科では、幼稚園・小学校の教職課程と保育士資格課程の各々の学外実習（３年次以降）を履修する前に、２年次に「基礎実習」で観察実習に取り組む教育課程を用意している。「基礎実習」は、聖学院大学児童学科に独自の科目である。子どもとの直接のふれあい経験が少なく、子どもとの関わりのなかではなかなか客観的な児童理解が難しい昨今の学生の課題や、そうした一方でより高い専門性が求められる教職・資格課程の実情に直面し、2015年度より「基礎実習」の授業内容を大幅に改変した。

新しい2015年度「基礎実習」では、観察実習を変わらぬ軸としながら、観察の場を駒込の聖学院小学校とし、７～８人の学生グループに学科教員一名が引率する形態をとることとなった。観察実習では、学生と教員が共に児童の姿を観察し、昼食を取りながらのディスカッションを行い気づきを言語化して共有する１日目と、学生だけで観察する２日目で構成され、学生たちはこの２日間について観察実習記録をまとめる。

観察実習の引率は、学科の教員全員が一度ずつ担うが、それぞれの専門を異にする教員にとっては、児童の観察と観察での気づき、気づきの言語化といった領域で学生への助言等の指導が求められることへの負担感・不安感は大きい。

そこで、学科全体での勉強の機会とするために、入江礼子先生にご無理をお願いし本研究会の開催となった。保育実践研究の第一人者でおられる入江先生には、子どもを観察すること、それについて記録に書いたり話し合ったりすることについてご講演をいただき、あわせて春学期に先行して実施した引率者から提出された引率記録や課題提起に対してコメントをいただいた。

以下は、その概要である。

＜私の体験から＞

大学院でご指導を受けた時、指導教官の津守眞先生が新しい研究方法を取り始められた時期だった。週に１日午前中に附属幼稚園に入って、午後に話し合いをする観察研究会が開かれ、津守先生と聖学院大学児童学科の創設時学科長をされた本田和子先生と、助手と院生と学部生が参加していた。附属幼稚園の中で自分の好きな場所で好きなものを見て、話し合いではそのときに考えた感想を言い、翌週にはレポートを持ち寄ってどんなことをその後考えたかを検討した。レポートの書き方も様々で、本田先生は詩の形式で出され、津守先生はユングやフロイトと関連させた考察を試みられていた。同じ場面にいても取り上げるエピソードは各人で異なった。その「違う」ということが、一番大きい学びだった。

自分が幼稚園教諭として現場に出たときは、子どもとの関わりをその夜に振り返って書くことが楽しみだった。書くことを通してその子どもに関する理解がすすみ、それが幼児を教育する基盤を形成していたように感じられた。

現在、時々、幼稚園などの園内研修に助言者として呼ばれることがある。わずかに30～40分の時間だけを切り取って観察し、そこで何か助言を行うことは非常に難しい。どういう視点で観察するかによっても、気付きは全く異なってくる。

＜「基礎実習」引率記録へのコメント＞

今回、７月中に引率した引率者２名の記録をみて、同じ「基礎実習」であっても書き方も形式も全く異なることが興味深い。例えば、

・事実を書いて、それに対して思ったことを次々に書いている。
・「～感心した」「感嘆する」「うれしい」「感動した」といった感動を表す表現が多い。
・引率者の専門領域に引き付けて、児童に対する支援について考えたりしている。
・最初に観察の観点を示している。
・学校が子どもにとっては学習の場に限らないことを、学習以外の出来事から示している。
・児童が気持ちを動かしながら生活している様子を示している。　　などに気付かされる。

「基礎実習」の一番の特徴は、児童がいる場に学生と学科教員が一緒に行くという点にあるだろう。一般の学外実習が、学生が一人で出かけて行って、学外の指導者に評価をいただいてくるというのとは、明確に異なる。また、普段、大学で、教わる側と教える側とに対峙していることとも、明確に異なる。一緒に出掛けて行って、一緒に観察して何かを感じる「基礎実習」では、正解を求めるのではなく、そこで何が起こっているのかに気付きあうことがねらいの主となるだろう。

共立女子大学の児童学科では、３、４年生と院生を中心に「さくらんぼ」という小さい親子グループをやっている。年間10回で３グループあるので30組ほどの母子が参加する。親子で遊ぶ場を学生がいろいろ考えてしつらえ、指導計画を練り、実践し遊び、反省会を開いて指導計画を練り直す。その中で、教員も、できない自分をさらす。学生も教員も等しく活動の主体になることで、一緒の場での育ちあいが実感されている。「基礎実習」のよさも、同様ではないかと感じている。

＜共有できる記録を目指して＞

記録が共有される要素として、事実（fact）と意見･考えたこと（opinion）が挙げられる。事実も、無論「自分が捉えた事実」であるから、客観的ではない。「自分が心を揺さぶられたこういうことがあった」ということが、ここでいう「事実」で、それに関して「自分がそのときはそう思った」という「意見・考えたこと」があることで、「最初自分はこう考えた。でも１週間後に考えたらやっぱりこうだった。１年後もしかしたらこうかもしれない」という、振り返る毎に考察に変化が起こりうる記録となる。個人的な文章である日記と異なり、記録は「事実」と「意見・考えたこと」が分化されていることで､「こういうことがあったのだ」と事実が客観視されて、そこに他者も関わる余地がある。そして、記録から事実を追体験して、「私はこう思う」というように他者も「事実」に対する「意見･考えたこと」を持ち得る。各々が「事実」を持ち寄って、他者と共有し検討し合うことが可能となる。記録にはいろいろな種類があり一概には言えないが、現場に出たときに他者と共有できる記録を書く力を、学生に身につけさせたい。観察と記録は、話し合いと切り離せないものだと考える。

子どもって「おもしろい、不思議」、「一生懸命生きている」、「いろいろなことを考えている」、そんなことを学生にどこかで気付いてほしい。学外実習に臨む際には、どうしても、学生は「先生」らしく振る舞うことに意識が向き、「先生」である以前に人と人として子どもと向き合うことが欠落しがちである。そのため、現場実習としてのふるまいから免れる純粋な観察実習で、子どもを人として見つめる経験をもつことは貴重だろう。学生が子どもの面白さに開眼するためには仕掛けが必要で、一緒に観察した教員が「おもしろい」「感動した」等と自分の気付きをそのまま表出する姿に接することも、その一つだと思われる。

書く作業に自然に取り組めない学生が増えていることは、学生にのみ責があるわけではないようである。小学校段階で、教師が指示して初めて板書されていることをノートに写しとるという指導がなされることがある。自分で必要と感じたことを感じた時にメモをする、書きたいとはやる気持ちのまま文字化する、といった経験が豊かでない学生は少なくない。言われればやる、という姿勢の学生に対して、「子どもって面白いよ」ということを伝え、「面白い！」という気付きを「書きたい」気持ちにつなげ、どの学生もが実際に記録として成立させるまで方向づけるということは、容易ではない。

学生と教員いう立場の違いを超えて、子どもの前では１人の人というふうに考えていく。場を共にして、教員が率先して自分なりの気付きや記録をさらして、それで考えたことを学生と教員とで対等に、ああじゃないこうじゃないと言い合う。ああじゃないこうじゃないとだんだんに言えるような学生に育てていくのは、一朝一夕にはできない。でも、「子どもって面白い」を共通項として、少しずつ多角的な理解を共有できるようになりたい。子どもが一生懸命生きていること、小さいだけに我慢していること、多くを考えたり感じたりしていること、そうしたことに敏感な学生に育ってくれることを願い、指導する教員の側が、たとえ拙いものであっても学生の記録に面白がってしまうこともあり得るのではないか。

実習ではとかく時系列で記録をとることが要求されるが、時系列記録は、記録の初学者にとっては、起こった事柄を追いかけることに終始し、それを書いたら何か書いた気になってしまって、なかなか考察するところまで行かない。「基礎実習」のような初期の実習であれば、「あれっ」と思った事実だけを焦点化して書いたり、他者と共有したいような事実を焦点化して書いたりすることも有効かと思われる。

学生にとっては書くということ自体が大変な作業である。面白いと思ったこと、自分が全く予測しなかったこと等、はっとした事柄を１つでも書きながら、少しずつ力をつけさせたい。何があってもいいし何でもいいが、何でもいいということを自分の内部で留めずに発題して、さらして、みんなで意見を述べ合うところまで到達すると、少しずつ変わってくる学生はいるかもしれない。全員が変わることは本当に難しいが、核になる人たちが育っていって、その人たちが現場で考えて実践して、子どもに関して意見交換をする面白さを知れたらよいのではないか。流れ作業の保育・教育ではなく、人がおり、人が育つところだと実感しながら取り組む人がふえることを願いながら、知恵を絞っている。

（文責：田澤　薫［たざわ・かおる］聖学院大学人間福祉学部児童学科教授）